



## 第2 創業へ。建設・交流とも深化への挑戦

### ◆中学校建設。小中併設で地域の基幹校へ

AEFAの学校建設が深化しています。

小学校を建設した村で中学校の要望が高まり、2010年度に中学校をラオスで3校、ベトナムで1校建設し、今年度も両国で各1校を建設します。



小学校の食堂を借りて勉強するラオスの中学生

ラオスの山奥には中学校がほとんどありません。20km以上離れた中学校……これでは進学を諦めざるをえません。木の下でも学びたいと願う子どもたちのため、中学課程新設を現地政府に申請し承認されました。これまで中学生は小学校の教室などを間借りしていましたが、新校舎に瞳を輝かせ、通学しています。

また、ベトナムにおいても中学校建設を開始。海外支援は小学校建設に集中しがちです。立派な小学校と荒廃した中学校……。これでは進学の夢を育めないと考え、AEFAは今後とも中学校建設にも注力します。

小中校併設により地域の基幹学校へと発展し、村全体の活性化にも貢献しています。(関連記事2、3頁)

### ◆研究授業・公開授業に招聘続く

AEFAの特徴である出前授業にも新しい動きがみえ始めています。交流校71校に対して140回を超える出前授業を行ってきましたが、交流校以外からの出前授業の依頼が年初から増えています。

1月20日、東京都新宿区立余丁町小学校6年生社会科(深尾剛先生)公開研究授業「世界の未来と日本の役割」に、AEFA理事長・谷川がゲストティーチャーとして招聘され、

佐藤と共に出前授業をしました。

東京ドルトンスクールのソーシャルスタディ(木村麦先生)にも3月5日～25日に3回にわたり谷川が招聘され、アジアの学校・子どもの生活を紹介しました。「小学生社長」たちが手作りグミの販売など自分たちで工夫して得たお金を、AEFAの提唱するワンコイン・スクールプロジェクトにご寄附いただきました。

また、2月23日、宮崎県日南市立細田中で行われた公開授業の講師として、AEFA金子がラオスとの交流事業を紹介。市内の小中学校の校長先生や総合的な学習担当の先生方が参加。その後の交流報告会で、多くの貴重なご意見をいただきました。

創業7年目。このように交流校以外からも研究授業や公開授業に招聘いただくことは、AEFA活動への理解浸透の証しとしてスタッフの励みとなっています。

### ◆新しい挑戦…教育現場への貢献の一助に

過去5年継続してきたAEFAフォーラムを今年は新しい形で展開します。

一つは、東京でなく地方で開催することで、より身近でより地道な交流事業を目指します。

今一つは、これら地方フォーラムを経て、熱心な先生方が東京に集まって研究会を行います。交流とは何か、子どもたちの世界観を深化させるための工夫とは何か、などを討議し報告書を一步進めて、教材にもなるような研究レポートに挑戦します。

本件に関連して、東京倶楽部様の助成が決定!……現地と日本の先生方が相互訪問し、研究授業を行います。それを反映させて教材を充実させたいと考えています。

## “日本のお友だちに…” ベトナムから、ラオスから ～東日本地震に激励メッセージ～

『日本のお友だちにあげて…』と、子どもたちがお米や鶏を学校に持ってきている」…ベトナムからの胸熱くなるメールです。多数メッセージから福島関係の二通を紹介します。

### ●ラオス・ドンチャイ中学校より建設支援先の飯館村へ 福島県飯館村のみなさま

日本のみなさま、特に私たちドンチャイ村にとって特別な関係にある飯館村のみなさまに、謹んでお見舞いを申し上げます。

サラワン県ラオガム郡ドンチャイ中学校の教師・生徒全員が、みなさまが直面されている大きな災害と津波被害の脅威を、そして今この瞬間に大変な思いをされている皆様の痛みを共に分かち合いたいと思います。

私たちは、みなさまがこの状況を何とか乗り越え、復興に向けて力を尽くせるように、心から祈っております。この予測できない事態に際し、日本のみなさま、そして飯館村のみなさまのご無事を願うと共に、これからも私たちはずっと皆様と共にいます。

— 2011年3月14日 心からの祈りをこめて

### ●ラオス・ナトゥール小学校より交流校の東館小学校へ 福島県矢祭町東館小のみなさまへ

私たちはナトゥール村の教員、児童、村当局です。

日本のみなさんに大きな被害を与えた津波と災害が起きたことを知った時、この事態にとっても悲しく胸が痛みました。心よりお見舞いを申し上げます。そして、二度とこのようなことが起きないことを祈っています。

私たちは、世界中の魂と共に祈り、東館小の子どもたち、先生方、みなさんがこの災害から立ち上がり、心身ともに健康な状態に復興されることを心より祈っています。

2011年3月14日

\*

◆東館小とナトゥール小の3年間の交流特集(p4～p10)参照

# ●2010年度● 25校を建設しました。

## トピックス

### ●ベトナム● ティントゥン小学校

コロニー外からも通学、偏見も緩和

生徒の親の80%がハンセン病患者のコロニー、ティントゥン村に2007年度に建設した小学校。素晴らしい校舎に先生も発憤、生徒の学習意欲も高まり、学校整備が一層進みました。偏見も緩和されコロニー外からの生徒数が増え、中学校建設支援の希望も出ています。



### ●ラオス● ピアラー小学校

藪から爆撃の跡。記念碑に

村人がお金を出し合って用意した学校建設地。藪を切り払い整地してみると、ベトナム戦争時の大きな爆撃の跡がありました。村では、この大きな穴を活用して養魚池とする・きの



こや野菜を栽培する等検討しましたが、戦争があったことを記念する碑とすることに決めました。レンガを張り巡らし、保存します。

### ●ベトナム● グエンフーカン小学校

子どもを愛し、学校を守る熱血先生方

コバン先生は、自分の子どものように生徒を愛し教育しています。「教育は自分の喜びです。天が健康を与えてくれているので、私のやるべき仕事に専念するだけです。この子どもたちがいい子に育てば、社会もよくなると信じています」

校長のフエ先生は赴任21年目。先生は学校で寝泊まりし、学校を守っています。まさにフエ先生の熱い血と汗の結晶の学校です。



コバン先生



フエ先生

### ●2010年度建設校(小学校)● ※ベトナム タンミー・ロット分校は建設中です。

( )内はご支援者/敬称略



ベトナム  
バックソン・アンカイ分校  
(日本財団)



ベトナム  
ティントオン・エナ分校  
(日本財団)



ベトナム  
ダクチャム・ダックロザー分校  
(日本財団)



ベトナム  
ゴックトゥ・コンプリン分校  
(日本財団)



ベトナム  
ゴックトゥ・ダックタン分校  
(日本財団)



ベトナム  
レバンタン・コンヒリン分校  
(日本財団)



ベトナム  
バンレム・テロン分校  
(日本財団)



ベトナム  
ダクサオ・ダクカクニヨ分校  
(日本財団)



ベトナム  
ダクハ・ティトゥ分校  
(日本財団)



ベトナム  
ダクナー・ハラン分校  
(日本財団)



ベトナム  
ダクナー・ダックリエプ1分校  
(日本財団)



ベトナム  
ダックロン・ダックプロ分校  
(日本財団)

# ●2011年度● 19校を建設します。

## ●2011年度建設校●

	小学校名	(分校名)	国名	民族	児童数	教室・設備	支援者(敬称略)
1	ダクサオ	ナンニョ第2	ベトナム	セダン族	78	3教室+WC+井戸	日本財団
2	ダクサオ	ナンロン第3	ベトナム	セダン族	62	3教室+WC+井戸	日本財団
3	ダックロオン	コンヒア第1	ベトナム	セダン族	113	3教室+WC+井戸	日本財団
4	ダクトカン	ダックブロン	ベトナム	セダン族	73	3教室+WC+井戸	日本財団
5	バンレム	テベン	ベトナム	セダン族	66	3教室+WC+井戸	日本財団
6	ゲンクエン	ダックラオロン	ベトナム	ロンガオ族	125	4教室+WC+井戸	日本財団
7	レバンタム	ダックカンペン	ベトナム	ロンガオ族	166	4教室+WC+井戸	日本財団
8	ダンチャンコン	コンニョカー	ベトナム	ロンガオ族	77	5教室+WC+井戸	日本財団
9	ゲンフーカン	プレイオノール	ベトナム	ロンガオ族	399	3教室+WC+井戸	日本財団
10	ゲンヒエン	ミーソン	ベトナム	キン族	130	3教室+WC+井戸	(株)エコロインターナショナル
11	カダイ	ババン	ベトナム	カトゥー族	45	4教室+WC+井戸	日本財団
12	チャヴァル	ロボA	ベトナム	カトゥー族	92	3教室+WC+井戸	日本財団
13	カダイタビン(中学校)		ベトナム	カトゥー族	500	4教室+2WC+井戸+台所+食堂	日本財団
14	スアंकアン	ゴアンA	ベトナム	タイー族	125	4教室+WC+井戸	日本財団
15	(予定)		ベトナム				日本財団
16	チャンヌア		ラオス	カタン族	128	3教室+教員室+WC+井戸	ワンコイン・スクール2校目
17	ブオンナム(中学校)		ラオス	タオイ族	36	3教室	S・Y様(夢の貯金箱)
18	カニョンケクナイ		ラオス	ラーヴェン族	125	3教室+教員室+WC+井戸	(株)近江兄弟社
19	ノントウム		ラオス	ラーヴェン族	153	3教室+WC	(株)ブロードウェイ



**ベトナム**  
マックディンティ・アンドゥオン分校  
(日本財団)



**ベトナム**  
グエンズイーフー(中学校)  
(日本財団)



**ベトナム**  
ホアバック・ジアンビ分校  
(株)サンキューホールディングス



**ベトナム**  
アップラン  
(独立行政法人郵便貯金・簡易生命保険管理機構)



**ラオス**  
コツマイ  
(ろくさん基金)



**ラオス**  
ピアラー  
(シルバーアーチ基金・大久保孝一)



**ラオス**  
ドンニヤイ(中学校)  
(福島県相馬郡飯館村)



**ラオス**  
ノンヤオ(中学校)  
(株)サンキューホールディングス



**ラオス**  
パチュドン(中学校)  
(独立行政法人郵便貯金・簡易生命保険管理機構)



**ラオス**  
トゥムリ-フン  
(坂巻・雨ヶ谷・久我・原田・上村)



**ラオス**  
ラオガム  
(中西重敏)



**タイ**  
アイエ(建設地造成)  
(イトアンド(株)夢の貯金箱)

AEFAは真の受益者である日本の子供達のため、交流活動を続けてきました。恵まれた自分達に気づき、自分自身を変えることです。アジアの友達と同じ目の輝きを取り戻し、自分の中にある素晴らしい心を生かすことです。日本の子供達が変わったモデル・ケースの一つ、東館小学校を紹介します。

## 交流の受益者は日本の子どもたち

東館小学校 校長 宍戸 仙助

### [I] 交流2年。児童・教師に大きな変化

#### 先進国との交流では得難い気づき

本校は、福島県最南端、人口6700人ほどの小さな町の、児童数150名ほどの小規模校です。本校の卒業生からAEFAを紹介いただき、平成20年4月にラオス南部山岳少数民族の小学校、ナトゥール小学校とフレンドシップを結び交流を始めて2年になります。

これまで、AEFAの谷川理事長様をはじめ、2年間で3回にわたり、矢祭町という交通の便の悪い場所にもかかわらず、出前授業のためにおいでいただき、本校の子どもたちに、日本と同じアジアにある「ラオス」という国の実情、そして、そこで生きる子どもたちの逞しい姿を教えていただきました。

子どもたちは、その出前授業から、ラオスの現状の中に、戦後間もない日本の姿との類似性を発見し、「今の日本は、ぼくたちのおじいちゃん、おばあちゃんが一生懸命働いて築き上げたものであること」、「昔、日本が助けられたのだから、今度は、ぼくたちが助ける番であること」、「助け合いはお互い様であること」などの気づきに至ることができました。

さらに、その交流学年(第4学年)を担当し、「ラオスの友だちに文房具を贈ろう」などの活動の指導に当たった若い女性教諭は、「物で満たされただけの豊かさはちっぽけだ」と、その本質を自らの言葉で喝破しておりました。この子どもたちと教師の気づきは、先進国と呼ばれる国々との交流からは得難いものではないかと考えました。

#### 子どもたちの瞳の輝きに学ぶ

20年9月、日本財団とAEFAの支援により、ラオス、ナトゥール小学校を訪問する素晴らしい機会に恵まれました。3回の出前授業で、ある程度は予備知識はありましたが、現地を訪れ、豊かさに慣れてしまった自分の目で見、耳で聞き、肌で感じたその印象は、35年にもわたる教職生活でも唯一無二のものでした。否、忘れることのできない「一生の宝」であると考えております。

ナトゥール村は、ラオス南部の大きな町からそれほど遠くない村でしたが、雨季のためもあってか、道なき道を四輪駆動車でやっとたどり着くことのできる村でした。そんな小さな村にAEFAの援

助で建てられた真新しい学校で学ぶ60名の小さな子どもたちに迎えられました。その子どもたちの純粋でまばゆく輝くその多くの瞳からのまなざしを向けられた私は、「クラスター爆弾が地面を覆い、飲み水も十分でない土地に暮らし」、「医者も看護師もいない、電気のない村に生き」、「教科書も文房具も満足にはない学校で学ぶ」この子どもたちの瞳の輝きこそ、私たち教師が、子どもたちとの学校生活の中で生涯追い求めようと決めたものであったことに気づかされました。

#### あの瞳の輝きを日本の子どもたちに

「物が無いからこそ、豊かでないからこそ、小さな頃から『妹・弟の世話をし]、創意・工夫を凝らし『森や川で生活の糧を探し]、家族の一員としての役割をしっかりと果たす。自らの創意・工夫により『人・物・自然]に主体的に働きかけることにより得られる『自己有用感]『自己価値観]、さらに、主体的に働きかけることから得られる『人・物・自然]からの『手ごたえ]、それらが、『あの瞳の輝きの源]ではないか]それが帰国して1ヵ月間考え続けた私の結論でした。

「あの瞳の輝きを今、日本の目の前の子どもたちに」、豊かさの中でしばらく忘れていたこの「使命感」、物が豊か過ぎて曇っていた「教育愛」。日本財団とAEFAの支援がなければ得ることのできなかった宝。残された数年の教職生活の中で、ラオスの子どもたちに気づかされたこの思いを、しっかりと機会あるごとにできる限り多くの人々に伝えていきたいと思えます。

少子化し、人類未曾有の高齢化社会を迎えるこれからの日本。この気づきと思いは、教職生活残り少ない私たちではなく、これからの日本を背負う子どもたちを導く若い教師たちにこそ、気づき・考え・思いを深めて欲しいことです。それこそが、今、無気力・無感動、閉塞感・疲弊感、自己価値観の喪失、無縁社会が広まりつつある今の日本の喫緊の大きな課題だと思っております。

(平成22年2月3日記)

### [II] 自己有用感と限りない可能性の自覚

#### ～3年間の交流を振り返って～

一昨年度は、「日本の夏休み」と題した日記を送り、各家庭で使われなくなった文房具を集めてナトゥール小に送りました。その

#### ●東館小学校●

- ・福島県東白川郡矢祭町
- ・明治6年開校、139年目
- ・全校生142名、7学級
- ・教職員14名
- ・文部科学省委託「学校図書・本の活性化推進総合事業」指定校(22.2研究公開)

#### ●ナトゥール小学校●

- ・ラオス国サワラン県ナトゥール村(少数民族スワイ族)、人口229人・41世帯
- ・生徒60名、教員2名
- ・石原拓一郎様(校舎)、宮本ゆり子様(井戸)のご支援により2008年建設



二重屋根のあるナトゥール小 新校舎  
佐川旭AEFA理事(建築家)設計



瞳を輝かせて。新校舎で学ぶ子どもたち

文房具が大事に大切にに使われている様子の報告から、本校の子どもたちは「物を大切にしていない自分たち」に思いを馳せ、また、「食べたくても、食べ物が十分でないラオスの友だち」を知り、「好き嫌いで給食を残してしまっている自分たち」の姿と比べます。「今にも吹き飛びそうに傾いた校舎で、必死で学ぶラオスの子どもたちの輝く目を見て、「日本の私たちは、負けている。恥ずかしい」と反省の言葉まで述べるようになります。

しだいにラオス支援の活動は、全校生に広がりを見せ始め、AEFA理事の出前授業で、現在のラオス南部の生活の状況と戦後間もない日本の様子とのあまりの類似に初めて気づきます。さらに、戦後まもなく、ララ物資やケア物資と呼ばれる外国からの支援物資で日本は助けられたことを知り、「今度は、ぼくたち・わたしたちが、助ける番なのだ」と言い始めます。ある児童は、「校長先生、すごいこと見つけたよ」と、校長室に駆け込んできます。「戦争が終わったあと、日本に賠償金をよこせて言わなかったのは、『ラオス』だけなんですよ」堰を切ったように話すその子は、喜びで輝いていました。いつとはなしに、「ラオスの子どもたち」という第三人称の言い方は姿を消し、「ラオス・ナトゥールの友だち」という第二人称の表現に変わっていきます。

私(宍戸)がナトゥール小学校を訪問してプレゼントした校歌が、ナトゥール小学校で、また村で歌われる様子を見て、楽器が一つもないことを発見し、楽器集めのポスター貼りの依頼に自分たちから町内の商店にてかけて行きます。また、トウガラシ栽培でワンコインスクール基金を始めました。そして今年度、より多くの基金を得るため、「食べるラー油」を手作りし、PTAバザーでの販売、そして、学習発表会での創作音楽劇「ラオスへ5,000kmの旅」の発表へとつながっていきます。ラオスの空で泳ぐ8mのこのぼりの勇姿を心に描き、うろこに全員が自分の名前を自分の手で記しました。

\*

…<なぜ、子どもたちは、これほど熱中し、これほど夢中になれるのだろう。>

「ラオス・ナトゥールの子どもたちの喜ぶ姿、目を輝かせほほえむ笑顔、その一人一人の笑顔、いつも脳裏に描いて活動を続けてきたこと、それが、強い動機付けとなり、子どもたちに大きなエネルギーを与えたのだ」と考えています。

ぼくたちも・わたしたちも「人の役に立つことができる」「今、ぼくたち・わたしたちが取り組んでいる活動は、ラオスの友だちの役に立っている」という自信。そして、その誇り。さらに、それを支えてくださる、保護者、町内外、県内外からのたくさんの応援と励まし。



ラオスの山奥の泥道に車は立ち往生。道は自分たちで切り拓く。スコップを手に宍戸校長



先生から宍戸校長(左)に手作りの竹細工が贈呈



「ラオス山岳民族との交流から」(福島民報2011.2.26/10回連載の第1回)

### 東館小&ナトゥール小 交流のあゆみ

#### ◆交流開始年次(平成20年4月～平成21年3月)◆

- ・4月 AEFAとフレンドシップ協定締結(22日)
- ・〃 出前授業(第1回)～アジアの国について学ぼう～  
講師:遠藤正芳(AEFA事務局長)  
石井克則(東館小卒業生)
- ・9月 メッセージカード「日本の夏」を送る
- ・1月 「眠っている文房具を贈ろう」(16日～23日)  
(鉛筆2100本、ボールペン620本他、51kg、みかん箱5箱。AEFAを通して贈る)
- ・1月 出前授業(第2回)～ラオス・ナトゥール小は、今～  
講師:佐川 旭(AEFA理事・建築家)
- ・3月 ナトゥール小から文房具の返礼(作品、竹細工等)

#### ◆交流2年次(平成21年4月～平成22年3月)◆

- ・5月 出前授業(第3回)～ラオスの植物を育ててみよう～  
講師:谷川 洋(AEFA理事長)  
(ラオス産のトウガラシとカボチャの種を贈呈)
- ・9月 宍戸校長、ラオス訪問(20日～27日)  
～校歌プロジェクト～
- ・11月 第4回AEFAフォーラムで「交流大賞」受賞
- ・2月 校歌プロジェクト(東館小校歌がナトゥール村に響く)
- ・3月 ラオスのカボチャの煮つけ  
カボチャギョウザ教室(小平氏の支援)

#### ◆交流3年次(平成22年4月～平成23年3月)◆

- ・5月 「楽器を贈ろう」～ナトゥールの友だちにメロディを～
- ・9月 出前授業(第4回)～ラオスの友だちの生活学ぼう～  
講師:金子恵美(AEFAコーディネーター)
- ・10月 「食べるラー油大作戦」(小平氏の支援)  
学習発表会「ラオスへ5000kmの旅」(創作音楽劇)
- ・1月 宍戸校長、ラオス再訪(5日～9日)

今年1月、第2回目の帰国報告会を聞いて、ある女の子は、「これからも、ラオスの友だちのために、いろいろなことをしてみたいです」と述べています。「いろいろなことをしたいです」ではなく、「してみたいです」と、その意志の強さを表現しています。また、紺碧の海と青く澄み渡った空を隔て、5,400km離れたラオス・ナトゥール村で歌われる東館小の校歌を聴いて、4年生の女の子が俳句を作り、全校生の前で堂々と発表しました。

「ラオスの子 空でつながる わたしたち」

3年間の交流で、本校の子どもたちがいただいたものは、「自己有用感」と「限りない可能性」の自覚です。

そして今、交流の真の受益者は、実は、当校の児童、ひいては日本の子供たちである、と確信しています。

(平成23年2月4日記)

## “かわいそう”から“今度は助ける番”へ。

### ラオス・ナトゥール小と交流を決定

平成20年春、東館小学校校長に赴任した宍戸仙助校長は、多くの引継書類の中の一つに目を留めた。アジア教育友好協会(AEFA)からの国際交流参加の案内状であった。東館小卒業生の石井克則氏の共同通信記者としての長い経験から母校に寄せる真情あふれる推薦状が添えられていた。かねてから国際交流に意欲的だった宍戸校長は、AEFAから詳しい説明を聞き、教育委員会とも協議し、4月22日、フレンドシップ交流協定に調印した。

### ラオスを知る…出前授業に驚きと気づき

調印後、4～6年生児童87名を対象に、総合的な学習の時間に遠藤正芳AEFA事務局長と石井克則氏による「出前授業」が行われた。厳しい環境の中で、懸命に、たくましく、明るく生きるラオスの子どもたちの姿が紹介され、児童の間に、驚き、感嘆、恵まれた環境にある自分たちの日頃に対する反省などの気づきを与えた(右掲)。

### メッセージカード「日本の夏」を送る

出前授業で、「自分たちはぜいたく」「ラオスの子どもは親の手伝いをたくさんしている」などの感想をもった児童たち。4年生26人が「日本の夏」をテーマに、海水浴など夏休みの思い出を絵と作文で表現。作品はAEFAを通して翻訳され、ナトゥール小に届けられた。

### 「文房具を贈ろう」、1週間でみかん箱に5箱

平成21年1月、交流を通してナトゥール小では文房具などが不足していることを知った4年生が「眠っている文房具を贈ろう」と発案し、全校児童、家庭に呼びかけ、さらに4年生は2人1組で役場、商店、銀行、郵便局、図書館など13ヵ所を訪問、協力を依頼。子どもたちの熱意に町の人々が協力し、

わずか1週間で、鉛筆2100本など51kg、みかん箱5箱分が集まり、26日の出前授業で訪れた佐川旭AEFA理事に託された。

ナトゥール小の設計者でもある佐川理事の出前授業は、子どもたちに驚きと感嘆、そして気づきを与え、交流への関心と意欲が一気に高まった(小松先生コラム参照)。

### ナトゥール小から返礼の作品、工芸品

贈られた文房具の返礼として、ナトゥール小から感謝状、交流作品、文房具を手に喜ぶ子どもたちの写真、竹細工などが届き、3月11日、4年生の国際理解授業の時間に報告された。児童は「笑顔がうれしい」など人の役に立つことの充足感、達成感を得た。

### 児童の感想文から

- ラオスの子は家の仕事とか弟とかのめんどうをみて、あと、川で水をくむのも子どもの仕事で、ほかに山や森で食材とかも取って、えらいなと思いました。(K.K.6年男子)
- お風呂がない、ごはんを手でたべている、そういったことにしょうげきをうけました。それに水くみをしたり、弟や妹のめんどうまでして。ぼくたちがあたりまえのように水を飲み、好きらしいものを食べていることがどれだけしあわせかと思いました。これからは水もまんぞくに飲めない人を考えていきたいと思いました。(Y.N.6年男子)
- 新しい学校ができて、とてもよかったですね。文房具を集めたので、いっぱい、勉強してくださいね。みなさんが笑顔になれば、わたしたちも笑顔になります。(M.S.4年女子)
- 佐川さんの話から、「むかしの日本も他の国のみなさんに助けってもらったんだな」、だから「今はぎやくに、わたしたち日本が助けるんだな」と思いました。(A.S.4年女子)

### “今度は助ける番。”…児童の心に大きな変化 ~佐川さんの「出前授業」で教わったこと~ 4年生担任 小松 光恵

佐川旭AEFA理事の出前授業で、戦後、日本が外国に助けてもらいながら、おじいちゃん、おばあちゃんが社会を立て直したことやラオスの困窮した実情を分かりやすく説明していただきました。そして翌日、子どもたちの感想文を読み、じ～んと胸が熱くなりました。子どもたちの心が明らかに変わってきたのを感じたからです。

「文房具もなくてかわいそうだな。お金もなくてかわいそうだな」そう思い、活動できたのは、子どもたちの優しさです。しかし、その優しさには、かわいそうという同情の気が強

かったと思います。それが、佐川さんのお話を聞き、

- ・日本も助けってもらったのだから、今度は助ける番。お互いさなんだ。
  - ・ラオスの友だちが笑顔になると、ぼくも笑顔になる。
  - ・ぼくもラオスの友だちのようにお手伝いをがんばってみる。
- と書かれていました。“同情”から“自分の問題”として。

今回の活動で、物で満たされただけの心は、ちっぽけだと思えてきました。とても大切なことに気づかせてくださった佐川さんに、心から感謝します。



出前授業に聞き入る東館小の子どもたち



集った文房具の使用具合を1本ずつ点検



届いた文房具を手に

## “ラオスの子”から“ラオスの友だち”へ。

### “ラオスの植物を育ててみよう”

交流2年次の平成21年度、宍戸校長はAEFAと協議し「ラオスの植物」を育ててみよう」に取り組んだ。

5月11日、出前授業に訪れた谷川AEFA理事長がラオス産のトウガラシとカボチャの種を贈呈。交流学年の4年生が、農家の指導を受け種を蒔いた。

### ラオス産のカボチャ料理を実習

ラオス産のカボチャは2個収穫したが、トウガラシは気候に合わないためか枯れてしまったため、国内産の種を蒔き、約1kg収穫した。平成22年3月17日、同校の取組みに賛同する篤志家小平一夫氏(郡山市中国料理店「珍満」社長)の指導で「カボチャギョウザ」を作り、給食時に会食した。また、同校の高田奈央美養護教諭がカボチャを使ったラオス郷土料理「ナム・ワーン・マックウー」を調理し、全員で試食した。

### 収穫の益金をワンコイン・スクール寄金に

小平氏はさらに、トウガラシと同校で栽培したシイタケを買い受ける形で多額の寄附もされ、その一部はAEFAが「子どもたちの“がんばり資金”でラオスに学校を建てよう」と全国の交流校に提唱中のワンコイン・スクールプロジェクトに寄託された。

(ワンコイン・スクール運動は交流16校の参加で、平成22年2月、ラオス・ポンタン小が建設され結実した。)

### 宍戸校長、ラオスへ。東館小校歌をラオス語で

東館小の校歌がラオス山岳地帯に響いた…。宍戸校長は、9月23日、ナトゥール小を訪問。校歌やチャイムのない同校に、石川雅啓氏(JETRO)によりラオス語に翻訳された校歌と鐘、AEFAの歌「君と僕は友だち」のCD、CDプレイヤー、絵本、運動用ボールを贈呈。また、児童から託された千羽鶴、「日本の12ヵ月」、児童からの手紙を手渡した。千羽鶴には「いつか、世界のどこかで友だちとして会えること」の願いが書き込められていた。

宍戸校長のギターやロールピアノ伴奏で、ラオス語の校歌を歌い、「君と僕は友だち」を日本語で合唱。また、絵本「じぶん」をラオス語で読み聞かせし、「スイミー」を英語で朗読、現地スタッフがラオス語で同時通訳した。

### “もっと、応えんしたい”

10月6日、帰国報告を兼ねた特別授業が全校児童を対象に行われ、校長の体験談に熱心に聞き入った。

宍戸校長が日本では想像もできない貧困と低い識字率、

クラスター爆弾の不発弾事故で毎年200人以上が犠牲になる現状、子どもたちの衣食住について説明すると、児童は自分たちとの生活水準の違いに驚き、昨年の4年生が送った手紙や絵が展示されていたり、文房具が大事に活用されていることを知ると、どっと歓声に沸いた。

宍戸校長が「こんなに貧しい国が同じアジアにある。日本からの支援を心待ちにしている」と結ぶと同時に、「先生！もっと、応えんしたい」と即座に声があがった。

### 「チャウレー コイ ペン ムーカン」…5400km越えて大合唱

平成22年2月25日、AEFAが現地撮影したDVDを教材に授業を行った。画面からナトゥール小の子どもたちの元気な歌声が響いた。その歌は、ラオス語の「東館小校歌」。何度も「ヒ・ガ・シ・ダ・テ」という言葉が。そして、「チャウレー コイ ペン ムーカン」(君と僕は友だちです)と繰り返される大きな声…。シーンと聴き入る子どもたち。やがて誰かが「チャウレー コイ ペン ムーカン」と口ずさむとみんなが次々と続き、海を越えて5,400km彼方との大合唱となった。

歌いながら次第に目頭を熱くする子どもたち…このとき、宍戸校長は4年女子の手紙「ラオスの友だちへ」の「まだ一度も会ったことはないけれど、私たちの心はつながっているよ」を思い出した。「ラオスの子たち」から「ラオスの友だち」へ。

交流開始から2年。三人称から二人称への変化に、宍戸校長は交流の確かな手ごたえを感じ、感無量となる。

## 児童の感想文から

- ぼくは、今までの自分の生活がふつうだと思っていました。でも、ラオスの人たちの生活にはびっくりしました。ラオスの人たちは、えん筆 1本や 2本をすごく大切にしているよこんでいます。ぼくたち日本人は、物をそまつにしているので、はずかしくなりました。(Y.S.4年男子)
- 日本は勉強ができる平和な国なのに、ほとんどの人が「めんどくさい、やりたくない」と思っています。ラオスの人たちは「ゆめがあつて勉強したい」と思っています。私もラオスをみならつて、がんばります。(H.K.4年女子)
- 私は、谷川さんの「学校を作ってあげるのではなく、作りたいと思っている人を手伝いたい」という言葉がとてもいいと思います。てつぼうも、「できない」と思うとできなくて、「できる」と思うとできた、ということがあったからです。私も、なにがともできると信じてがんばります。(S.K.4年女子)



ラオス産のカボチャを育てギョウザ作り



ナトゥール小の子どもに合唱を教える宍戸校長



AEFAフォーラムで交流参加56校の中で「交流大賞」を受賞(09.11.1)。「地域、町ぐるみの協力のおかげ。町全体でいただいた賞です」(宍戸)

# ラオスの子 空でつながる わたしたち

## 『楽器を贈ろう』、福島全域に拡がる

交流2年次の学期末。ナトゥール小にメロディー系の楽器がないことを知って、「よし、次は楽器だ」と4年生がポスターを作り掲出を役場、商店などに依頼して廻る。活動は、新学期から新4年生にリレーされた。

子どもたちの熱意に町の人々も積極的に協力する模様が地元新聞に報道され、呼びかけは福島市、会津若松市、いわき市など福島県全域に拡がり、234個の楽器が提供された。福島市森合連合会から楽器116個、また、いわき市の山崎登喜様から遺児の愛したメロディオンと笛を「ラオスの子どもさんに奏でてもらえたら息子も喜ぶでしょう」という手紙と寄附金10万円が寄せられた。

## 『食べるラー油大作戦』、販売に長蛇の列

ナトゥール小に教材や遊具の購入資金を贈るため児童が「食べるラー油」を作り販売することを発案。前年の「カボチャギョウザ」作りに続いて今回も篤志家小平一夫氏の指導をいただいた。10月30日、PTAバザーでの販売コーナーには長蛇の列ができ、240個を40分で完売(@500円)。境野米子前県教育長様他の支援募金を含めて18万円余がラオスに贈られた。また、ラベルを児童全員が制作し「ラベル・コンテスト」も実施。販売用ラベルは、第1回矢祭町絵本コンクール最優秀賞受賞者の加藤祐子様が協力制作した。

## 創作音楽劇『ラオスへ5000kmの旅』、児童が振付

学習発表会(10月30日)では、創作音楽劇『ラオスへ5000kmの旅』を上演。担任の小松光恵先生の脚本・演出で、振付は子どもたちが考えた。この劇は、手作りラー油を完売した子どもたちが販売金をラオスの友だちに届ける旅をする冒険談で、最後に、ラオスの友だちと無事出会い、「チャウレーコイ ペンムーカン(君と僕は友だち)」と声を合わせて喜び合う…。児童の取り組むひたむきさが伝わる音楽劇となり、全校生、参観の保護者を感動させた。

## ラオスの種、宮崎で育ったトウガラシが届く

12月13日、春に栽培した苗が育たなかったことを知った大石孝裕氏(AEF A顧問)が東館小を訪れ、宮崎県日南市で育てたラオス産の種から作った唐辛子約320個を4年生に贈呈した。世界の恵まれない友だちを支援する子どもたちへの大石氏の励ましであった。「児童の活動を理解し支援く

ださる方々が日本中各地にいることを知ることは、子どもたちの勇気と『夢と希望』につながります。ありがたいことです」(宍戸校長)。

## 宍戸校長、ラオス再訪。こいのぼり、英訳絵本を届ける

平成23年1月5日、宍戸校長はラオスを再訪。全児童143人の名前入りこいのぼり(全長8m。片野宗和前矢祭町教育委員長様の提供)、英訳絵本、楽器をナトゥール小に届けた。また、福島市の学童クラブ「森合けやきっ子ハウス」でも児童約40人が名前とメッセージ入りのこいのぼりを宍戸校長に託した。

絵本「シチューをもらったかえりみち」(加藤祐子作)の英訳は矢祭中2年生5人と英語指導助手のロジャーズ先生の協力をいただいた。

## そして、“ラオスの子 空でつながる わたしたち”

第2回目の帰国報告会を聞いた4年女子は、ナトゥール村で歌われるラオス語の東館小校歌を聴いて、俳句を作り全校生の前で発表した。

ラオスの子 空でつながる わたしたち

ナトゥール小との3年間の交流成果はこの一句に象徴されている。

### 児童の感想文から

- みんなが4年生だった頃、頑張って集めたえんぴつやシャープペンまで、ちょっとずつ使ってむだがないように、少しずつ使うということが、日本とは違うと思いました。(Y.M.5年男子)
- ラオスには楽器もなく、遊び道具もない。不発弾(弾)で毎年多くの方が大変な目にあっていて、服もない。その人たちが一生懸命に生きていて、がんばっていることがすごいと思いました。私たちとはちがう力を持っていると思います。(M.S.5年女子)
- たくさん勉強して、ラオスに行って、みんなに勉強を教えてあげられるようになりたいです。そして子どもも大人もかけ算わり算をできるようにしたいです。(R.I.5年女子)
- 日本も、昔たくさんの国からたくさんの物もらったのだから、ぼくは世界中の困っている人たちを助けたいと思いました。ぼくは、世界中の人に幸せになってほしいと思いました。(Y.S.5年男子)



福島全域に拡がった『楽器を贈ろう』。福島市森合連合会から116個届く



『食べるラー油』の販売。終わったばかりの音楽劇の衣装の子も



子どもたちが振付。学習発表会で創作音楽劇



音楽劇の脚本表紙カット

## 子どもが、学校が、村・地域がかわる

AEFAが目指した変化がここにある。そして一番嬉しいのは、この変化の原動力が子どもたちであり、その真ん中に子どもたちがいるということだ。

得られたものは大きい。この交流に参加した方々が、そのことを実感していると信じたい。

### 子どもが かわる

交流を始めた頃の子どもたちの認識は、「ラオスの子は貧しくてかわいそう」「水くみなどの家の仕事や弟妹の面倒をみて、えらいな」というようなものであった。

ラオスの実情が分かってくると共に、子どもたちの認識が変化していった。最初の変化は、佐川AEFA理事の出前授業だった。「日本は昔、外国から助けてもらった」ことを知ると、「今度は日本が助ける番だ」ということに思い至った。そして、『文房具を贈ろう』、次いで『楽器を贈ろう』につながっていった。

交流が進む中で、ラオスの子どもたちが、貧しい環境下でありながら、目を輝かせて学んでいる姿や、贈られた一本の鉛筆を大事にしていることを知って、「ものを大切に

よう」「私たち・ぼくらは負けている」「もっとがんばらなければ」という気づきを得ていった。そしていつしか、「ラオスの子」から「ラオスの友だち」と呼ぶようになっていた。

途上国との交流に

よって、恵まれた日本にいることの反省と気づきを得た子どもたちは目を瞠るような成長を示し、それは校長はじめ教師たちの当初の想定をはるかに上回るものだった。



実った! ラオスのトウモロコシ。種蒔き・草取り・取り入れ・ラー油作り・販売を自分たちで。益金はラオスへ贈られた。

### 学校が かわる

ラオス・ナトゥール小と交流を開始した時、交流学年の担任(小松光恵教諭)は、途上国との交流がはたして学校課題の《夢と希望を育む》ことにつながるのか、半信半疑だったという。

調べ学習やAEFAの出前授業でラオスの実情について知るとともに子どもたちの気持ちが、“貧しくてかわいそう”から“今度は自分たちが助ける番”に変わってきたことに、担任は途上国との交流の最初の手応えを実感した。

「文房具を贈ろう」の時、役場や銀行、商店に掲出を依頼して廻る体験は、話し方の生きた勉強になったこと、また、集った文房具が「もし、使えなかったら気の毒」と3,000本(個)の鉛筆などを一つずつ児童が点検を始めるなどに自

主性の成長がうかがえたことは、授業だけでは得られない成果であった。

また、給食の残食ゼロの日が多くなり、学校としてありがたいことである。

交流学年の担任だけでなく、養護教諭がラオス料理を作って給食時にしたり、「文房具」や「楽器」集めの際、他学年も参加することで、学校全体として一つの活動に対して一体感が生まれたことも特筆される。



AEFAフォーラムで交流を発表する小松光恵教諭(09.11.1)

高田奈央美養護教諭。ラオス郷土料理を調理。給食時に全員で試食。

### 村・地域が かわる

【ナトゥール村で】今年1月、ナトゥール村を1年3ヵ月ぶりに再訪した宍戸校長は、前回との変わりようを次のように記している。

「まずは言葉であった。前は標準ラオス語→現地語でないと通じなかったのが、今回は標準ラオス語がそのまま、子どもたち全員に通じたのである。わずか1年少しで、ここまで変化する子どもたちの潜在力と先生の努力には目を見張った。

村の状況も変わっていた。学校前の木のブランコが古タイヤを利用した3人乗りのブランコに変わり、さらに、村の何ヵ所にもブランコが作られていた。子どもたちの遊びを大事にする「心のゆとり」ができはじめていること、また通路と空地がはっきりと分かれ、村全体が少し整然として

きた。二人の先生と村長とのお話からも学校を中心に村がまともになり始めていることを痛切に感じた。これが、AEFAの提唱する3層建構想の「住民参加」なのだ納得した」

【矢祭町で】「活動をする過程で、保護者、町内、ときには県内の方々との接点が、児童・学校とも著しく増えた。活動が周りの人々に理解され、協力がもらえることは児童にとって、《夢と希望を育む》大きな一歩となった」(宍戸)



村のそこかしこで見受けられるようになった手作りブランコ

## 子どもたちが自ら考える教育 ～フレンドシップ交流から得たもの～

福島県矢祭町教育委員会前教育長 高信由美子



東館小学校がアジア教育友好協会様のお骨折りで、東南アジアのラオス・ナトゥール小学校とフレンドシップ校になり、交流が始まって3年になります。

その間、東館小学校の子どもたちは、目を瞞るほどの成長を見せてくれました。

まず、ラオスに友だちができたことの喜びです。その友だちが粗末な学校で、鉛筆や学習用具もなく、学びたくても経済的に貧しくて学べない子どもがいることを知りました。そして「友だち同士は、助け合おう」という心をあつという間に開花させました。なぜ、このようなことがこんなにも早くできたのか、それは、知識を詰め込むだけの管理された覚える教育ではなく、フレンドシップ交流とは「考える教育」だったからです。交流することで視野を広げ、自分たちで考え行動することが身につきました。その一つが文房具を贈ろうという活動です。児童代表が町役場で町長に協力をお願いし、銀行や商店を訪問して行動を開始すると地域で協力する人が現れ、子どもが使い残した鉛筆やノートを学校に持参する人も、つぎつぎと出てきました。また、ラオスのトウガラシの種を栽培して、「食べるラー油」を作りバザーで販売しよう考えると、郡山市の中国料理店主も支援に乗り出しました。子どもの発想は素晴らしく、保護者も地域をも動かしたのです。

当時、教育長だった私は、「教育とは、子どもたちが夢を育み、独創的に物事を考えることができる人間を育て、社会に送り出すこと」と考えていましたので、宍戸校長先生の先を見通す力とエネルギーな行動力に期待し「ラオスの小学校を見てください。校長先生が目で見たと、感じたことを子どもたちに校長先生の言葉で伝えてください」と頼んだのです。宍戸校長先生は、連休といえど一週間近く学校を留守にすること等で躊躇しましたが、強引に背中を押したのが、2009年の初秋でした。2011年1月に二度目の訪問を果たしましたが、帰国されたあと、「受益者は日本の子どもたち」という訪問記をまとめています。東館小学校の子どもたちは、互いに、個性を認め合い、存在を認め合い、自分はこんなふう役に立っているという「生きる意味」を知ることができたのです。

## 喜びと感動に包まれて

2008年4月22日、新緑に包まれて走るJR水郡線に乗って、AEFAの遠藤正芳事務局長(当時)と一緒に東館小に向かった。1957年(昭和32年)3月の卒業以来、51年ぶりの再訪だった。あれから3年。ナトゥール小との交流が大きく発展し、ラオスの子どもたちが東館小の校歌を歌っている。交流の仲立ちをした卒業生として、活動を見守りながら喜びと感動に包まれた日々を送っている。

2006年から公益団体である日本財団で働き、深いつながりを持つAEFAを知った。谷川理事長から交流校がなかなか見つからないと聞いて、母校を推薦した。交流は私の想像以上に進んだ。宍戸校長をはじめ先生たちと子ど

## 日本中の子供たちに広がり、 夢と希望

福島県教育委員会前教育長 境野 米子



1992年、夜10時過ぎにバンコクに着き、お腹がぺこぺこで食堂に行きました。椅子に座ろうとしたら、子どもが走ってきて椅子を引き、座るとすぐに水を運んできました。「えっ、こんな時間に子どもが働いている」と驚き、「かわいそう!」と思いました。でも、てきぱきと働く子たちを見て、すごいと思いました。人懐こくて、こちらが微笑めばにっこりと微笑み返してくれる素直さに感動しました。

2週間ほどタイ中部の米の生産農家を訪ね歩きました。泊めていただいた家には中学3年、小学5年、3年の3人の子どもがいましたが、一緒に散歩や掃除をし、同じ蚊帳に寝て、学校にも行きました。そして、目をキラキラさせ、こちらが微笑めばにっこりと微笑み返してくれるたくさんの子どもたちに出会いました。

日本に帰ってきて、夜遅くに山手線の電車内で眠り込む塾帰りの子どもを見て、胸を衝かれました。夜に働くタイの子どもたちよりも、かわいそうに思え、豊かさ、幸せについて考えさせられました。日本の子どもたち皆の目がキラキラと輝き、微笑むようになるには、どうしたらいいだろうかと考え続けてきました。

福島県矢祭町の東館小学校では、ラオスの小学校との交流を続けてきました。この3年間、文房具を届けたり、東館小学校の校歌をラオス語にして贈ったり、また今年はいのぼりや楽器を届けました。

こうした活動を通して東館小学校の生徒さんが、「(ラオスの子どもたちと)空でつながっているんだね」と話したことを聞きました。涙が出るほどうれしく思いました。

世界中の人たちと、空でつながっている。一人が泣けばみんながかなしい、一人が微笑めば、みんながうれしい。そんな世界にわたしたちは暮らしていると思えたら、きっと争いはなくなり、飢えている人たちもいなくなる。そうした夢と希望が与えられ、校長先生やこのプロジェクトを支えてくださっている方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

(福島県教育委員会委員・薬剤師・生活評論家)

東館小学校卒業生 石井 克則  
日本財団コミュニケーションアドバイザー

もたちの熱意が町の人たちに伝わり、交流支援の輪が拡大したのだ。

2009年9月には宍戸先生らとナ小を訪問した。そこには、美しい瞳を持った子どもたちが待っていてくれた。いまでも時折、子どもたちの顔を思い出す。長い間、新聞記者※をしながら、あのような瞳に出会うことはなかったからだ。

閉塞感の強い時代だ。子どもたちには高い志を持って強く生きてほしいと思う。交流を糧に、子どもたちは日本とラオスを支える存在に成長するだろう。若者たちが2つの国を相互訪問し、握手を交わす日が必ず実現する。そう信じている。(※元共同通信社)



シートン・ラオス大使と握手



ラオス大使(中央)と「ラオス親善大使」たち



GYPSY QUEEN と合唱

銀杏募金に謝辞。  
前田晃日本財団  
常務理事



◆東京都武蔵村山第十小、ラオス大使館訪問

ワンコイン・スクールプロジェクトに全校で取り組む同校。中心となって活動を推進する「ラオス親善大使」5、6年生23名が、1月24日、ラオス大使館を表敬訪問しました。「みなさんも私と同じ「大使」。将来、本当に大使になる方がいるかもしれませんね。これからもラオスと日本の友情を深めてください」とシートン駐日大使。

◆東京都武蔵村山第八小、ワンコインPJの歌を合唱

11月15日、全校ワンコイン・スクール集会。活動に学年で取り組んだ4年生からの贈呈式後、アジアで活躍するGYPSY QUEENから「ワンコイン・スクールPJの歌」のプレゼントが。子どもたちも合唱、心が1つになった。

◆東京都品川区杜松小学校、「ぎんなん募金」継続

「ぎんなん募金」で継続して支援くださる同校。猛暑の昨夏は実がたくさん成り、何回も拾い・洗い・乾かし・袋詰め・の作業を頑張った子どもたち。売り上げをワンコイン基金と杜松小の銘が刻まれた「友情の鐘」として。

◆福井県勝山市村岡小学校、手作り作品を販売

学校花壇の花を使った押し花しおり、給食の廃油を活用した手作り石鹸とろうそく、植物の苗などを町民文化祭で販売しました。売上をワンコイン基金に寄附。

◆三重県津市高野尾小学校、みんなのディベートで

キャリア教育の一環「会社を作ろう」の取組みで、手作りの製品を考案、販売。売上をどのように使うか児童がディベートを行い、約半分をワンコイン基金に寄附。

◆静岡県桑村小学校、ラオスに募金活動

石原拓一郎AEFA理事の母校。「石原先輩のラオスへの支援」をテーマに、国際支援・協力を学ぶ同小5年生。全校の募金活動等でラオス・イルン小学校に寄附。

◆長野市大岡小学校、大根売上に寄附

“大根プロジェクト2010”学校の畑で児童が栽培、販売した大根の売上をラオス・トンコー小に。長野篠井ライオンズクラブ(2007年トンコー小を建設支援)の皆様によるご紹介・ご協力です。



手作り作品を町民文化祭で販売



“子ども社員”(中日新聞 2010.12.7)



母校で出前授業、石原 AEFA 理事



児童が学校畑で大根を栽培

心がつながる＝世界が助け合う

理事長 谷川 洋

東日本大地震に襲われた。痛ましいことだ。だが、日本人の心の底に培われていた素晴らしい徳性(思いやり)と生命力の発揚を見るにつけ、私は胸が熱くなった。また、全世界からの支援・協力の動き。まさに「世界が助け合う＝心でつながる」と確認できる。

AEFAとして今年では日本での活動基盤の強化を図ろうと思っていた折のこの天災。アジアだけでなく、日本の子どもたちのためになるプロジェクトをさらに推進せよという天の声かもしれない。この厳しい事態に直面して、負けないぞという勇気が胸の内に噴き上がってくるのである。その背景にはAEFAが建設したアジアの学校の子どもたちからの心温まるメッセージがある。自分たちが極貧にありながら、何らかの力になりたいという提案や祈り。なんとも嬉しい限りである。これまで推進してきた交流事業が、心の交流であったことの証しでもあるように思えてならない。

そうした交流事業の一端を紹介すべく、福島県の東館小学校の3年間を特集した。奇しくも被災地でもある。犠牲者がなかったことは不幸中の幸いであった。

何事も前向きに対応するのが我々のモットーである。被災地の復旧・復興過程での子どもたちの活力と成長を見守りたい。アジアの山奥で建設する学校と日本の被災学校の交流。子どもたちが励まし合い、地域の団結・成長や復興過程を報告し合い、見守り合うというプロジェクトを立ち上げたいものだ。

AEFAが目指すところは、子どもたちの心の成長支援でもある。人間力の育成支援でもある。物質的に豊かな環境を前提とした現代教育が持つ弱点をAEFAなりに何か補完できないものだろうか。生命力・人間力が如何にして地域の力・助け合いにより育まれるかを伝えたいものだ。

シルバーアーチ基金、大久保孝一様、建設校開校

1月30日、ラオス・ピアラー小学校が開校。ご支援のシルバーアーチ基金様より、川上様ご一家の列席で開校式が行われました。サラワン県教育局長プートン氏、ラオガム郡長が歓迎。



左から川上貢一様、美保様、桂様

川上様から子どもたちに浄水器や文房具、運動用具が贈呈されました。

(株)サンキューホールディングス様、支援2校目開校

「サンキュー夢スクール基金」様のご支援第2校目となる、ラオス・ノンヤオ中学校の開校式は、高須賀副社長様他同社関係者を迎え、村人総出で挙行。たくさんの風船に結ばれた「ノンヤオ中学開校」の垂れ幕が大空高く舞い上がり、生徒によるラオスの歌・踊りの披露、交流の輪はいつまでも続きました。なお、この模様は3月1日付Vientiane Timesに大きく掲載されました。



石原拓一郎氏支援のイルン村集会所

ラオス・イルン村に、村人たちの強い熱意と労力、そしてイルン小建設に続いて石原氏の支援で建てられたコミュニティラーニングセンターは2月開所。同村を2年ぶりに訪れた石原氏を、村人はバナナ畑を切り拓いて道路を整備して歓迎。石原氏が「この村の発展を、私も村人の1人としてお手伝いします」と挨拶すると、センターから溢れるほどに集まった村人から、大きな拍手が沸き起こりました。



開所式で、石原氏(右)

ベトナム奨学金を継続支援

銀河ネットワークグループ様、議員の会様より、奨学金を継続してご支援をいただいています。今年も50余名の児童がお米や教材等の支援を受けています。

——谷川理事長のマスコミ紹介——



2011.2.23  
東京新聞

2011.3.7号  
& 3.14号  
週刊教育資料



●ご支援一覧 (2010.11 ~ 2011.3)

	支援者	支援先・内容
I. 学校建設支援	株式会社ブロードウェイ様	ラオス ノントゥム小学校 3教室・WC
	株式会社エコロインターナショナル様	ベトナム ゲンヒエン小ミーソン分校 3教室・WC・井戸
	匿名希望様(日本財団 夢の貯金箱)	ラオス プオンナム中学校 3教室
II. インフラ支援	中西 重敏様	ラオス ラオガム小学校 5教室・活動室・教員室・WC
	鈴木 千恵子様	ラオス パチュドン小中学校 井戸
III. ソフト支援	山崎 登喜様	ラオス ナトゥール小学校 先生の給与・教材
	中川 千恵子様	ラオス ピアラー小学校 先生の給与・教材
	津北ロータリークラブ様	ラオス ナトゥム小学校 教材・運動用具など
	銀河ネットワークグループ様	ベトナム タンホアA小学校 奨学金
	国際ソロプチミスト 東京・麻布支部様	ラオス 師範学校生徒の奨学金 一村一教師、ラオス山岳僻村の生徒が おらが村の先生となるべく、師範 学校で学ぶための奨学金として
	ちくちくぬいぬいボランティアさんによる作品売上	
津金 睦子様		
IV. 交流等	社団法人東京倶楽部様	第6回AEFAフォーラム
	村上 俊雄様	フレンドシップ交流資金に充当
	青山 季男様	
	匿名希望(S.T)様	
	木村 敬道様	
	中国料理 珍満様 小平一夫様	

ボランティアのみなさん

いつもありがとうございます。

- |          |             |           |
|----------|-------------|-----------|
| 青木 文子    | 佐藤 裕        | 成島志帆子     |
| 石塚都美子    | GYPSY QUEEN | 福田 澄繪     |
| 加藤 祐子    | 杉崎くに子       | 増田 郁子、妹さま |
| 門真なみはや高校 | 鈴木 博康       | 三浦 航      |
| 工藤 卓二    | 染谷 和美       | 三上 正芳、由紀  |
| 熊木 満喜    | 高井 愛        | 横瀬 定且     |
| 小垣外明子    | 高橋 正子       | 横田 一馬     |
| 五嶋 礼子    | 中森 朋子       | 吉村 彩      |
| さつき里香    | 長原 歩        | 若井 淳子     |

新会員のご紹介

新入会の方々、ありがとうございます。

- <個人会員>15名
- |        |        |       |
|--------|--------|-------|
| 井村 哲郎  | 野口 昌彦  | 丸山 正樹 |
| 久野 明子  | 野末 国宏  | 村上 俊雄 |
| 小玉 靖子  | 野村 行洋  | 室井 恵子 |
| 瀬野尾 千恵 | 萩原 健太郎 |       |
| 土倉 莞爾  | 藤原 勝子  |       |
- <法人会員>  
株式会社ベスト/NPO法人 環境フロンティア21  
アルケーウィル株式会社 (敬称略)

賛助会員によるご支援を

アジア教育友好協会では、アジアの子ども達に対する教育支援や、日本の子ども達との国際交流を支援してくださる会員の方を募集しています。

- 賛助会費  
・個人 5,000円(年間)  
・法人 30,000円(年間)

認定を受けていますので、ご寄附は寄附金控除の対象となります。

認定NPO法人 アジア教育友好協会 AEFA(アエファ)  
Asian Education and Friendship Association

本 部:〒105-0014 東京都港区芝3-3-10 芝園オーシャンビル8F

TEL 03(6426)0720/FAX 03(6426)0721

Email: tokyo@nippon-aeфа.org URL: http://www.nippon-aeфа.org ブログ: http://blog.canpan.info/aeфа/

